

氏 名 澤井 真代

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大甲第 1368 号

学位授与の日付 平成 22 年 9 月 30 日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本歴史研究専攻
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 石垣島川平の宗教儀礼－実践とことば－

論文審査委員 主 査 准教授 内田 順子
教授 常光 徹
准教授 松尾 恒一
教授 狩俣 恵一（沖縄国際大学）
教授 赤嶺 政信（琉球大学）

論文内容の要旨

奄美、沖縄、宮古、八重山の島々からなる琉球列島の各地においては、女性神役を中心として、農作物の豊作や豊漁、住民の健康を祈願する儀礼が行なわれてきた。それらの儀礼は今日に至るまで、土地ごとに消長や変化を遂げながら、あるものは今日まで継続されている。こうした集落単位の儀礼を構成する要素として、従来、「歌謡」、「文学」と呼称されてきた、人々が神や人に向けて発する歌や唱え言などの、声をともなうことばによる儀礼的实践（以下、「儀礼歌謡」という）がある。

儀礼の構成要素としての儀礼歌謡は、琉球列島の儀礼における神と、神役と、共同体の構成員の、三者の関係を考察するうえできわめて重要な資料である。このことは、儀礼歌謡の研究を、テキストのみでなく実践の実態に即して調査、考察することにより明らかになる。このことはまた、個別の儀礼歌謡のみならず1集落の通年の儀礼に対して総合的な検討を行なうことにより明らかになる。

しかし、琉球列島全域の歌謡テキストを編纂し、琉球列島の歌謡全般についての先行研究を数多く蓄積する「南島歌謡研究」の分野においては、個別の儀礼歌謡テキストが、担い手の住まう集落における儀礼歌謡の実践の論理から切り離され、南島歌謡研究の依拠する学説—「文学の発生」を追究する学説—の枠組みの中で、琉球列島の歌謡の起源を究明するものとして論じられるという、実態と乖離した議論がなされてきた点に問題がある。

また、社会人類学及び民俗学の分野からは、沖縄と宮古地域における特定の儀礼歌謡を対象に、担い手の実態を明らかにした重要な考察が行なわれているが、そこでは神役組織の頂点に立つ女性神役の儀礼歌謡にもっぱら焦点が当てられており、1集落の年間を通じた儀礼における儀礼歌謡を支える、多様な担い手とその相互関係に着目した総合的研究がなされていない点に問題がある。

これをふまえ本論文は、琉球列島南西端の八重山諸島、石垣島^{かひら}川平集落に着目し、通年で行なわれる農耕儀礼における儀礼歌謡の実践とその習得について、継続的な現場観察と聞き取り調査に基づき、集落の多様な構成員に着目して、その特質を論じることを目的とする。川平の儀礼の実践実態と本研究目的に即し、川平の儀礼歌謡に加えて、川平の儀礼を構成する非定型の発話を、研究対象に取り込む（以下、これら川平の歌・唱え言・発話を「儀礼的事ことば」という）。儀礼歌謡をその構成要素とする儀礼が展開される琉球列島地域にあって、川平集落は、儀礼と儀礼を構成することばとしての歌・唱え言・発話の実践が、人々の神認識に裏打ちされたものとして今日まで多数、継続されている点で、着目される地域である。川平では、4人の女性神役「ツカサ(司)」を中心とする年間の儀礼が、農作業の手順に沿って、作物のつつがない生長とその結果としての豊穰、また住民の健康の祈願を目的として、年間に二六回行なわれており、各儀礼に必要とされる儀礼的事ことばが、人々に習得され実践されている。その中でツカサは、自らが帰属する拝所「オン(御嶽)」の神を主として集落の神々に対して、「カンフツ(神口)」という唱え言を習得し実践する。ツカサのカンフツは、次に見るように他者に聞き知られず、筆記も許されないことばであることから、先行研究で考察されることはほとんど

なかった。しかし、川平の儀礼及び儀礼的ことばの要をなすものであることから、本論文の習得と実践の側面に着目する方法で、その実態を明らかにする必要がある。

ツカサのカンフツは、その習得と実践がツカサ以外の人に固く閉ざされており、ツカサ以外の人々が耳にすることのできないことばであるが、ツカサ四人の間では、文言と意味理解の共通化をはかる「カンフツツラシ」と呼ばれる唱え合わせが定期的に行なわれている。また時には、集落の生活の変化がカンフツに反映される場合があり、こうしたことから、ツカサのカンフツは、ツカサから神のみに届けられることばであるとともに、集落の神と人々を媒介するはたらきをもつものであることが分かる。またツカサのカンフツは、集落の神に何らかの具体的な「意味」を届けることのできる唯一の媒介物であるとも言うことができる。

女性神役が中心となる儀礼が展開される琉球列島地域における、川平の地域的特質としていま一つ指摘できることは、川平は、かつて石垣島北西部の諸集落で行なわれていた来訪神「マユンガナシ(真世加那志)」の儀礼が、今日まで継続されている唯一の地域であるということである。マユンガナシ儀礼は、ツカサによる儀礼実践や、ツカサが帰属する拝所「オン(御嶽)」の神役組織体系とは、別の枠組みで組織された成員集団のもとで行なわれ、マユンガナシの成員は、儀礼当日に各戸訪問した先の家で唱える唱え言「カンフツ」—ツカサのカンフツとは異なる—を、習得し実践する。

川平のマユンガナシのカンフツは、従来の南島歌謡研究における文学発生論において、文学の初源的な姿としての「神が発することば」として大きく着目されてきたが、実際にマユンガナシ儀礼を執り行なう人々の実態は明らかにされていない。まず、マユンガナシ儀礼が行なわれる場の実態に即すと、本儀礼には、マユンガナシを迎えカンフツを聞く人々のはたらきが不可欠であることが指摘できる。

来訪するマユンガナシに具体的に対応する各家の当主は、唱えられるカンフツの定型句を耳で捉えて返事を入れる。また当主は、カンフツを唱え終えたマユンガナシ—この場面のマユンガナシは、“神”として、ことばを話さない—に対して、マユンガナシのカンフツの文言を引用しながら、饗応し、その場の儀礼過程をすすめる。こうしたことのできる当主とは、カンフツについての実践的な知識を備えた、マユンガナシの元成員—迎える側として最も望ましいとされる立場の人—である。

カンフツについての実践的な知識にもとづいた当主と成員のやりとりを、周りで見守る家族も、カンフツを聞いている。そうした家族の中には、成員にはなり得ない女性や子どもであっても、カンフツを覚えてしまう人がいる。また、カンフツは、儀礼の場を越えて日常の場でも、生活上の教えとして参照され、さらに、儀礼における他の歌などを習得する際に、知識の基盤とされることもあった。従来、マユンガナシのカンフツは、厳に秘儀的な「神のことば」としての側面が強調されてきたが、もとより神から人に向けて発せられるこのことばは、集落の人々にゆるやかに共有されていたのである。

川平には、ツカサのみが神に届けることのできることばとしてのカンフツと、集落の人々が各々で接し、聞くことのできるマユンガナシのカンフツが並存している。その周辺でなされる、伝統的な川平方言で敬語を多用して行なわれる挨拶や連絡などの「儀礼的発話」には、儀礼の中核をなす唱え言が展開していることが多々ある。こうしたことばの習得と実践の実態を通して見えてくるのは、一集落の人々が神と結び、多様

な関係のあり方である。人々の実態に即して明らかになる神とのその関係は、社会における儀礼をめぐる諸問題について、たとえば今日の社会状況下で変化を続ける儀礼の動態といったことを捉えるうえで、有力な手がかりとなる。

博士論文の審査結果の要旨

奄美・沖縄・宮古・八重山の島々からなる琉球列島では、琉球王国時代に国家的祭祀組織に組み込まれていた女性神役が、今日においても、集落単位の儀礼の中で中核的役割を果たしている。こうした琉球列島の儀礼においては、人々が神や人に向けて発する歌や唱えごとなどの、声を伴うことばによる儀礼的実践が、重要な構成要素となっている。本論文は、儀礼と儀礼を構成する歌・唱えごと・発話について、それを担う人々の知識と実践の実態に即して総合的な研究をおこなったものである。

本論文の優れている点は、八重山諸島石垣島川平集落における 26 の儀礼を対象に、通算 174 日間のフィールドワークを行い、儀礼の全体（時間・空間の実態、供物の材料や準備、生業との関係など）をふまえ、人・モノ・時間・空間をトータルに把握した上で、儀礼における多様な音声言語のありようを解明し、その特質を論じている点である。儀礼や儀礼歌謡の伝承実態については、沖縄・宮古諸島では先行研究があるものの、八重山諸島では未着手の領域である。また、八重山諸島は、折口信夫も早くから着目した男性成員による来訪神儀礼が豊富であることからもうかがえるように、儀礼歌謡の担い手が多様性に富んでいる。琉球列島の儀礼の言語実践に関するこれまでの研究では、儀礼の中核的な担い手である女性神役と、彼女たちが歌う儀礼歌謡に焦点が当てられてきたほか、儀礼から切り離して歌謡のテキストを分析するという手法がとられてきた。本論文では、中核的な女性神役の歌謡だけでなく、男性の担い手や、儀礼の周縁部にまで目を向け、多様な音声言語が伝えられ、実践されてきたことを、儀礼の観察と聞き取りに基づいて実証的に明らかにしており、琉球列島における今後の儀礼歌謡の比較研究に貢献する研究成果であるとともに、一地域の事例研究にとどまらず、儀礼研究の新しい方法論を提出している点も評価できる。

本論文が分析の対象としてとりあげたのは、①女性神役「ツカサ」たちが唱える「カンフツ」、②男性によって担われる来訪神儀礼における「マユンガナシ」神の唱える「カンフツ」、③儀礼の多様な参加者による、挨拶・連絡・感謝などを述べるための、伝統的な川平方言による非定型の発話、④特定の歌い手あるいは参加者全員による歌、である。

ツカサのカンフツとは、各儀礼の目的に沿った祈願の内容を、伝統的な川平方言を主とする言葉遣いで、ツカサが拝所「オン」の神に向けて述べるものである。カンフツは、ツカサが神のみに向かって唱えることばで、ツカサ以外の人々には知られないように習得されるという。したがって、本論文の申請者自身にも、カンフツの文言が明かされることはなく、調査は容易ではなかったと見られるが、儀礼の観察と聞き取り調査に基づいて、神役就任儀礼以降のカンフツの習得過程のほか、カンフツの内容（儀礼の目的・参加者・供物など、儀礼に関する説明がよみこまれていること）、定型の文言のほかに、非定型の文言が語られること、儀礼の変更に伴ってカンフツが変更される場合もあることなどを明らかにした。さらに、そこには、ツカサたちに、「神様はことばで言わなければわからない」という神認識が共有されており、集落の人々の生活に根ざした儀礼の過程や変化を丁寧に神に伝えるツカサの言語実践の実態を明らかにした（第 1 章）。

こうした女性神役のカンフツと対照的であると本論文が位置づけるのは、男性によって

担われる来訪神儀礼における「マユンガナシ」神の唱える「カンフツ」である。年の変わり目にマユンガナシが川平を訪れ、豊穡をもたらしたという由来伝承に基づき行われている儀礼で、男性成員が蓑笠をつけてマユンガナシに成りかわり、各戸を訪れて新年を予祝するカンフツを唱える。家主は、マユンガナシを丁重に迎え、カンフツを聞き、マユンガナシに語りかけながら饗応してもてなす。マユンガナシのカンフツは、従来の南島歌謡研究における文学発生論において、文学の原初的な姿としての「神が発することば」の例として注目されてきたが、実際に儀礼を執り行う人々の実態は明らかにされてこなかった。本論文は、マユンガナシを構成する男性成員のカンフツの習得過程を明らかにしたほか、マユンガナシを迎え、饗応する側の人々の言語実践の実態をも明らかにし、マユンガナシをもてなす人々にも、カンフツが広く共有されていることを明らかにした点は、本論文の特に優れているところである（第2章）。

また、儀礼において、川平方言で敬語を多用しつつ、神役同士で交わされ、あるいは、神役から一般の儀礼参加者に向けて発せられる、挨拶・ねぎらい・連絡などの内容をもつことばを「発話」としてとらえ、儀礼遂行にこうした発話が不可欠のものであることに着目して、発話の習得過程を明らかにした。本論文が「発話」と位置づけるこの領域は、従来の研究では見過ごされることが多く、これを研究対象として見出した点は高く評価できる。さらに、特定の歌い手や儀礼の参加者全員が歌う歌について、カンフツの習得が、これらの歌の習得にどのように影響するのかについて、歌い手自身の認識の聞き取りに基づき、カンフツについての知識が、他の歌を覚えるときの知識上の拠り所とされていることを明らかにした（第3章）。

以上の言語実践の実態をふまえ、共同体におけるツカサの役割とそのはたらきについて、マユンガナシと獅子舞における神観念と対比させながら、川平における神観念の重層性が論じられる。ツカサは、カンフツによってオンの神に直接語りかける。ツカサ以外の人々は、ツカサに媒介されるかたちで神と接する。一方、マユンガナシ儀礼では、ツカサの媒介なしに、人々は直接マユンガナシと接し、マユンガナシが発する神の言葉を直接聞く。さらに、結願祭で奉納される獅子舞との対比では、獅子頭が神であると認識されている一方で、その奉納は、ツカサによるオンの神への媒介を要するという関係になることを儀礼の観察により明らかにしている。こうした観点から川平の神観念が論じられたことはなく、神認識の重層性を儀礼の実践実態から明らかにした点が評価できる（第4章）。

以上をふまえ、結論部では、儀礼における中核的な言語実践と、発話などの周縁的な言語実践が再度検討され、ことばの習得と儀礼実践の観点から、その関係性と重層性が明らかにされる。ツカサのカンフツ、マユンガナシのカンフツ、儀礼的発話を立体的に対比させて考察したことは、今後の琉球列島の儀礼研究に新しい展開を示したものとして高く評価できる（終章）。

ただ、本論文は、考察の対象を現在の川平の伝承と実態に限定しており、現在のありようを書きとどめた貴重な記録である反面、歴史的な視点および他地域との比較の視点からの考察に弱いところがあることが、公開審査会で指摘された。たとえば、マユンガナシのカンフツの文言は、八重山の他地域の芸能で伝承される文言と共通する部分があるほか、沖縄方言が見られるなど、琉球王国時代の士族層がもたらした沖縄の芸能の影響があることが、先行研究において指摘されている。マユンガナシのカンフツが、現在の川平におい

てゆるやかに共有されているという実態は、この儀礼の演劇的な特質と関連があると考えられる。歴史的な観点と、他地域との比較という視点から、本研究は一層大きく発展することが見込まれる。

ただし、論文全体としては、人・モノ・時間・空間を丹念に記述しながら、儀礼における多様な音声言語のありかたを、実証的かつ総合的に解明する必要があるという新たな研究視点を提示しており、本論文が今後の琉球列島の儀礼研究に与える学術的な意義は非常に高いと評価できる。以上により、博士学位論文として値するものと判断する。